

認知症高齢者への児童の理解を深めるために —学校教育での、役割演技による道徳の時間の実践を通して—

早川 裕 隆*

(平成23年9月29日受付；平成23年10月25日受理)

要 旨

現在、約200万人を超えていると推定される介護を必要とする認知症高齢者は、2015年には、250万人を超えるのではないかと考えられている。そして、その増加に合わせるように、高齢者に対する虐待も増加しており、被虐待高齢者の半数近くに認知症の症状が見られたとの報告がある。このように、認知症高齢者の理解については、今後大きな課題となることが予想される。

本稿では、認知症高齢者とのかかわりを内容とした資料を用いた、役割演技による道徳の授業の効果や可能性について、事例をもとに考察することを目的とする。役割演技による道徳の授業では、①認知症高齢者に対する児童の理解が、一方的な理解から状況的理解（相互的理解）へと変化し、②自分とのかかわりで認知症高齢者とのより良い関係を追求し、③支援者としての役割を創造したり、認知症高齢者を肯定的にとらえたりするなど、実感的な理解が生ずるといった一連の効果がみとれた。そして、そこに、一生涯にわたり人間関係を支える土台ともなるべき大切な教育活動としての目的や、計画的な実施の意義があると考察した。

KEY WORDS

role-playing 役割演技 moral class 道徳授業 understanding the aged with dementia 認知症高齢者の理解 sympathy based on bilateral relations and mutual understanding 実感的理解

1. はじめに

2000年4月に高齢者の介護保険が施行されて以降、日本の認知症高齢者の実態が明らかになってきた。坂口ら（2004）によれば、要介護または要支援と認定された高齢者のほぼ半数に認知症の症状があり、また、介護保険施設入所者の8割に認知症の症状がある。さらに、現在、介護を必要とする認知症高齢者は約200万人を超えていると推定されており、2015年には、この人数が250万人を超えるのではないかと考えられている（図1参照）。

一方、要介護高齢者が増加するにつれ、高齢者に対する虐待も増加していることが、2006年の高齢者虐待防止法施行で始まった厚生労働省の調査で明らかになっている。例えば、厚生労働省（2010）によれば、平成21年度の養護者（『高齢者を現に養護する者であって介護施設従事者以外の者』）であり、高齢者の世話をしている家族、親族、同居人等）による虐待判断件数は15615件、16002人にのぼり、そのうちで、認知症日常生活自立度「Ⅱ以上」（基準については図2参照）の者がしめる割合は、45.7%であった。すなわち、虐待を受けた高齢者のうちの半数近くに、認知症の症状があるということである。また、同調査結果では、被虐待高齢者の約8割が女性で、虐待者は息子（41.0%）、「夫」（17.7%）、「娘」（15.2%）の順であったことが報告されている。

さて、文部省（1999）でも紹介されているように、学校の様々な教育活動の中で、高齢者との交流活動が行われている。しかし、総務庁（1999）によれば、高齢者との交流で、小～高校までの児童生徒の意識はより温かで積極的な交流を求めるようになってきているものの、一方で、「お年寄りについての気持ちは、前と変わらない」（23.1%）、「お年寄りはかわいそうなので、歳をとりたくないと思うようになった」（11.0%）、「お年寄りとは話が合わないし、一緒にいるのは好きではない」（4.1%）と負の効果が現れた子どもたちもいる。中～高校生に交流に参加したくない理由を聞く問いに対しては、「暇がない」（37.2%）、「お年寄りとは話が合わないと思うから」（37.0%）、「活動のペースが合わないと思うから」（31.7%）、「趣味の対象が違うと思うから」（26.3%）、「気を使うのはわずらわしいから」（21.8%）の順となっている。

今世紀は、介護保険施設だけではなく認知症高齢者の在宅での介護も益々増えていく時代である。そのため、認知症高齢者を、積極的に地域で支え合っていくようとする考え方やシステムの構築などが切実な課題になると考えられる。しかし、ケアに関するスキルもさることながら、まずは、認知症高齢者の徘徊や妄想に対する理解を含め、高齢

	2002	2005	2010	2015	2020	2025	2030	2035	2040	2045	単位 万人
西暦											
痴呆性老人	149	169	208	250	289	323	353	376	385	378	
自立度Ⅱ以上	(6.3)	(6.7)	(7.2)	(7.6)	(8.4)	(9.3)	(10.2)	(10.7)	(10.6)	(10.4)	
参考：痴呆性老人	79	90	111	135	157	176	192	205	212	208	
自立度Ⅲ以上	(3.4)	(3.6)	(3.9)	(4.1)	(4.5)	(5.1)	(5.5)	(5.8)	(5.8)	(5.7)	

(注) 1) 数字は第1号被保険者のうち要介護(要支援)認定を受けた者に係るもの。カッコ内は65歳以上人口比(%)
2) 2002(平成14)年9月末について推計した「要介護(要支援)認定者における痴呆性高齢者」と「日本の将来推計人口(平成14年1月推計)」から算出したもの(治療や介護に関する技術の発達など政策的な要素は織り込まれていない)。

図1 痴呆性高齢者数(要介護・要支援認定者)の将来推計 (厚生労働 2004年6月号p.6より抜粋)

者の気持ちを理解しようとする心情なくしては、高齢者介護の問題も、先に述べた高齢者虐待に関する問題も、解決の糸口は見えてこないことは明らかである。このように考えてくると、学校教育では、交流などの体験活動の前に、まずは高齢者の心情や立場を理解できるようにすることが肝要であり、これ無くしては、体験活動の効果の一方で、高齢者に対する嫌気や偏見を抱く子が増えてしまう、あるいは、単なるイベントに終始して、自分とのかかわりで(道徳的価値が)とらえられない危険性が否定できないのではなかろうか。

ところで、筆者(1998)は、役割演技(ロール・プレイングの訳 以下「役割演技」と表記)による道徳の授業は、「向社会的な行動」と関連があると言われる「共感性」「役割取得能力」「向社会的道徳判断」の育成に有意な効果が認められたことを、実証的に明らかにした。そこで本報告では、筆者が実施した役割演技による道徳の授業とおして、児童が認知症の高齢者に対する理解を深めていく様態を検討しながら、役割演技による道徳の授業が高齢者の理解に果たす可能性を考察していく。

認知症高齢者の日常生活自立度

- ランクⅠ：何らかの痴呆を有するが、日常生活は家庭内及び社会的にほぼ自立している。
- ランクⅡ：日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意していれば自立できる。
- ランクⅡa：家庭外で上記Ⅱの状態が見られる。
- ランクⅡb：家庭内でも上記Ⅱの状態が見られる。
- ランクⅢ：日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが見られ、介護を必要とする。
- ランクⅢa：日中を中心として上記Ⅲの状態が見られる。
- ランクⅢb：夜間を中心として上記Ⅲの状態が見られる。
- ランクⅣ：日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが頻繁に見られ、常に介護を必要とする。

障害高齢者の日常生活自立度(寝たきり度)

- ランクJ(生活自律)
何らかの障害等を有するが、日常生活はほぼ自立しており独力で外出する。
- ランクA(準寝たきり)
屋内での生活は概ね自立しているが、介助なしには外出しない。
- ランクB(寝たきり)
屋内での生活は何らかの介助を要し、日中もベッド上での生活が主体であるが座位を保つ。
- ランクC(寝たきり)
1日中ベッド上で過ごし、排泄、食事、着替において介助を要する。

図2 判定の基準(平成21年3月31日 厚生労働省老健局老人保健課長通知…老老発第03310001号より引用)

2. 研究の目的

筆者が行った役割演技による道徳の授業について、高齢者の理解の視点からその効果を検討し、計画的・目的的にやっていくことの意義や可能性を考察する。

なお、本稿は、拙著「痴呆性高齢者の理解の問題に関して学校教育ができること—役割演技による道徳の授業を通して—」(2005「道徳と教育」No322・323 pp.71-81 日本道徳教育学会)に別の事例を加えるなど大幅に加筆、修正し、さらに認知症高齢者の理解の視点から、特に認知症高齢者に対する肯定的理解の実現に果たす役割演技の効果を実証的に示す目的で再構成したものである。

3. 授業の実際

3. 1 資料名「おじいちゃんの海」(きみがいちばんひかるとき6年 光村図書 一部改編)

○児童：C県H小学校6年生(男子17名,女子19名)

会場：教室(前1/4程度をステージに見立てて,そのスペースを確保。クラスの1/3が4年時に筆者が担任した児童で,その児童には,役割演技による道徳の授業の経験がある。)

※本授業は,担任に代わって筆者が行った。

○授業時期：平成15年11月

3. 1. 1 資料の内容

よしこは手足と言葉の不自由なおじいちゃんと同居しているため,夏休みも家族で出かけることができない。そのため,どうせだめだろうと思いつながりながら家族で海に行くことを提案すると,おじいちゃんをデイケアセンターにあずけて日帰りで海に行くことに決まる。よしこも,ふだんおじいちゃんの介護をしている母も,海を楽しむことができた。

海から帰った夜,デイケアセンターから帰ってきたおじいちゃんはよしこのうでのにおいをかきながら,「海,海…」と言って,笑っている。そんなところに父の知り合いから,海に来るように誘いの電話が入る。両親は乗り気だが,よしこはおじいちゃんの嬉しそうな顔を思い出すと,どうしたらいいかわからなくなった。

3. 1. 2 ねらい

自分の欲求にのみとられることなく,おじいちゃんなど家族の気持ちを理解しようとするをとおして,家族みんなの幸せを求める大切さに気づき,協力して楽しい家庭をつくろうとする心情を育てる。(内容項目 4-(5)家族愛)

3. 1. 3 授業の様子(展開の大要については図3参照)

授業では,夏休みなのに,在宅介護を必要とするおじいちゃんがいるために,家族一緒にはどこにも出かけられないよしこや,おじいちゃんの介護をしている母の苦労を想像した後,役割演技でデイケアセンターへおじいちゃんを預けて父の知人のところへ海水浴にでかける相談をするよしこ(男児)と両親が演じられた。

(1) 「おじいちゃんを海水浴に連れて行くと,お母さんが大変だから…」

よしこを演じた児童は,お母さんのために,おじいちゃんをデイケアセンターに預けて海に行こうと父親を説得し,おじいちゃんをデイケアセンターに預けて海水浴に行くこととなった。

演じられた後の話し合いでは,観客の多くから「おじいちゃんを海に連れて行くとお母さんが大変だから,デイケアセンターに預けて海水浴に行った方がいい。」と,演じられた関係を支持する感想が多く出された。しかし,「おじいちゃんは海に行きたいのにおいていくのはひどい。」といった怒りや「おじいちゃんを海に連れて行って,親なんだから,(よしこが楽しめるよう)お母さんがおじいちゃんの世話をすればいい。」()内は筆者による)といった意見が出された。すると,よしこを演じた男児は,「やっぱり,おじいちゃんを連れて行ってあげたい。そして,お母さんではなく,自分が(お母さんにかわって)おじいちゃんの世話をしたい。」()内は筆者による)と希望したので,おじいちゃんを海に連れて行く場面を演じることにした。

(2) 「おじいちゃんが喜んでくれてよかった…」

海に着くと,みんなでおじいちゃんを車いすに乗せ,よしこ(男児)と父と二人で車いすを押しながら,おじいちゃんに海を見せてあげた。おじいちゃんは昔を懐かしみ,多弁になって,海に連れてきてもらえた喜びを語った。そばにいた母もその様子を笑顔で見守っていた。

演じられた後の話し合いでは,観客は海に連れて行ってもらったおじいちゃんの喜びや感謝の気持ちを共感的に理解し,さらに,おじいちゃんが喜んでることを喜ぶ家族の姿を指摘した。よしこを演じた児童からは,おじいちゃんの喜ぶ様子を嬉しく思う気持ちが語られ,おじいちゃんを演じた児童からは,家族への感謝の気持ちが語られた。さらに,父親を演じた児童から,家族がおじいちゃんの喜びを喜んでることを嬉しく思う親心が語られて,授業は終了した。

(3) 授業後の感想

授業後のアンケートでは、授業前には5名だった「デイケアセンターにおじいちゃんを預けて、おじいちゃん以外の家族で海に行った方がよい」という回答が、全く見られなかった。

父を演じた児童は、「初めはおじいちゃんを海に連れて行くのはいやだった。だが、海に行きたいおじいちゃんのお気持ちや、普段おじいちゃんの世話をしている母の苦勞を思い、おじいちゃんを海に連れて行って、(母ではなく)自分がおじいちゃんの世話をしようという気持ちになった。自分たちが世話をするたびにおじいちゃんが喜ぶのを見て、嬉しくなった。」と感想を書いた。また、よしこを演じた児童は、「最初、おじいちゃんをデイケアセンターに預けようと考えたのは、お母さんが大変だからではなく、おじいちゃんを海に連れて行くのが面倒だったからだ。おじいちゃんの車いすを押しているとき、初めは面倒だなと思ったけれど、おじいちゃんが嬉しそうな様子だったので、自分も嬉しくなって、世話をするのが楽しくなった。」と感想を書いている。

3. 2 資料名「おばあちゃんとの話」(みんなのどうとく 6年 学研 一部改編)

○児童：C県H小学校6年生(男子17名、女子14名)

会場：教室(児童は5年生からの持ち上がりで、6年になった際に、前担任の異動に伴い、担任のみが筆者に代わる。会場では、机を廊下に出して椅子に着席。前1/4程度をステージに見立てたスペースとして確保し、そこで演じるようにした。)

○授業時期：平成14年10月

3. 2. 1 資料の内容

「ぼく」は、家の近くに住む認知症のおばあちゃんを気の毒に思い、ある日ねこに話しかけているおばあちゃんを、「ぼく」の家に誘う。初めは心配そうにしていたおばあちゃんだったが、「ぼく」が苦勞しながらおばあちゃんと話しているうちに、二人の心が通じ合って互いの目が潤んだように感じた。しかし、数日後におばあちゃんに会うと、「ぼく」はおばあちゃんに、「おめえだれだ」と言われてしまう。

3. 2. 2 ねらい

出来事だけでなく、親切にしてくれた人のことすら忘れてしまう「おばあちゃん」の悲しみを理解し、「おばあちゃん」の立場に立って「おばあちゃん」に親切にしようとする心情を養うことをとおして、誰に対しても相手の立場に立って温かく親切にすることの大切さを実感する。(内容項目 2-(2) 思いやり・親切)

3. 2. 3 授業の様子(展開の大要については図4参照)

授業では、資料を提示した後、おばあちゃんを「かわいそうと思うのは失礼だ」という児童の発言(つぶやき)を取り上げた。しかし児童は、授業開始直後には、なぜ失礼なのかを十分に説明することができなかった。

そこで、ねこと話しているおばあちゃんと、おばあちゃんを家に誘う「ぼく」(以下、太郎と表記)を役割演技で演じるようにした。すると、児童は、なかなか家に入ろうとしないおばあちゃんを誘う太郎の苦勞と、太郎に親切にされたおばあちゃんの喜びを理解した。

一方、観客から太郎の親切を忘れてしまうおばあちゃんに対して、「せめて太郎の名前を忘れないように、おばあちゃんが名前を憶えるまで親切を繰り返す太郎をやりたい。」という発言があったので、この発言をした児童が演じる太郎と、おばあちゃんの新たな二者関係を演じることにした。

(1) 「ぼくの名は太郎だよ、憶えた？」

太郎はおばあちゃんに自分の名前を憶えてもらおうと、何度も自分の名前を連呼しながら憶えたかどうか問い、そのたびごとに、おばあちゃんは太郎の名前を確認した。やがて、太郎がおばあちゃんの手を引っ張って家の中に案内し、お茶やお菓子を勧めたところ、おばあちゃんは怖がって、部屋の中で立ちすくんだまま、座ろうとしなかった。

演じられた後の話し合いでは、観客からおばあちゃんの恐怖の様子が指摘された。太郎を希望して演じた児童も、自分を憶えてもらうことに夢中で親切の本質を見失い、おばあちゃんとの関係が築けなかったことに気付き、「ちょっとしつこすぎると思った。」と発言した。そして、「憶えててもらわなくていいから、おばあちゃんに親切にしたい。」と、さらに新たな役割を演じることを希望したので、同一演者による太郎とおばあちゃんを演じることにした。

(2) 「一緒においでよ」

太郎はおばあちゃんに会うと、「おばあちゃん、ほくのこと憶えてる。」とたずねたが、おばあちゃんから「おめえだれだ。」と言われてしまう。しかし、太郎は「まあいいや。おばあちゃん、おいしいお菓子があるから一緒においでよ。」と優しく誘い、家の中まで案内した。そして、おばあちゃんが家の中に入ってくると、「おばあちゃん、おいしいお煎餅とお饅頭と羊羹があるけれど、どれを食べる。」とたずねながら、おばあちゃんにお茶と座布団を勧めた。おばあちゃんがお煎餅を希望すると、「これとってもおいしいよ。」と言って、二人でおいしそうにお煎餅を食べることができた。

(3) 「太郎のことを忘れちゃうのが、申し訳ない。」…おばあちゃんの悲しみ

演じられた後の話し合いでは、演者からの感想で、親切な太郎と太郎の行為を心から喜ぶおばあちゃんの相互関係が実現されたことが明らかになった。さらに、おばあちゃんを演じた児童が、「こんなに親切にしてもらえたのに、太郎のことを忘れてしまうことが、申し訳ない。」と感想を語ると、観客は、「おばあちゃんは太郎のことを忘れようとして忘れるのではなくて、忘れてしまうことを悲しんでいる。」と発言し、おばあちゃんの悲しみを想像し始めた。そして、忘れまいとしているのに忘れてしまうことを悲しんでいるおばあちゃんを「何もできない変な人とか、かわいそうな人と言うのは失礼だ。」と発言して、授業の初めにみられた「失礼」という発言の意味を明確にすることができた。

さらに、授業開始直後に「『かわいそう』と言うのは、おばあちゃんに失礼だ。」と発言した児童が、「おばあちゃんにとっては、太郎といるときの喜びは10でも、その後忘れてしまってもまた0になってしまう。そして、また太郎と会って喜びが再び10になるように、おばあちゃんの喜びは10と0の繰り返しだ。でも、太郎はおばあちゃんと違って、おばあちゃんとの交流を繰り返すうちに、10の喜びが15になり20になり25になり… 増えていくけれど、0にはならない。」と発言し、認知症の症状を相手の立場に立って理解した上で、親切な役割を創造しようとする意欲が高まったことが確認された。

(4) 授業後に書かれた児童の感想

- 本当におばあちゃんのことを好きなら、名前を憶えてもらえなくたって、おばあちゃんと話ができるだけでいいと思う。
- おばあちゃんがうれしそうに笑っていたので、とてもうれしかった。おばあちゃんがこんなに喜んでくれたのだから、(自分を)憶えてもらえないのは残念だけれど、すてきなことだと思う。
- おばあちゃんは、太郎に親切にされたことがたまらなくうれしかったと思います。だから、全部は無理でも、ところどころは記憶に残っていたのではないかと思います。でも、おばあちゃんは親切にしてくれた太郎の気持ちを考えると、(太郎のことを忘れてしまうのに、それでも自分に親切にしてくれる太郎の気持ちが)うれしくて、全部は憶えていないことが悲しかったと思います。
- おばあちゃんは、太郎に親切にされてうれしくなって「前にこの子と会ったなあ」と考えているように感じた。
- 太郎はおばあちゃんに「おめえだれだ」と言われても、仲よくなるうとがんばっていると思った。
- おばあちゃんが涙ぐんだのは、自分が物忘れがひどいので太郎のことを忘れてしまうかもしれないと思うと「こんないい思いを忘れたくない」と思って泣いてしまったのだと思います。
- おばあちゃんが太郎に「お煎餅と羊羹と饅頭とどれがいい」と聞かれたとき、「お煎餅」と答えたのは、お煎餅を食べながら楽しく話したことを少しでも憶えていたからだと思う。
- おばあちゃんが、「おめえのじっちゃんは何度も(太郎に)聞いたのは、ひとりぼっちのおばあちゃんが太郎も自分と同じようにひとりぼっちになっていないかどうか心配だったからだと思います。

4. 考察

本稿の目的である、高齢者の理解の視点からその効果を考察する。

児童は授業の初めには、(認知症) 高齢者に対して、関係を持つことが面倒だと思われるのではじめから関係を回避しようとしていたり、頭で考えた親切を一方的に果たそうとしてうまくいかずに困惑したり、記憶障害や認知機能障害に起因するコミュニケーション障害に対して不快感を抱いたりした。このようなことは、高齢者、特に認知症などにみられるコミュニケーション障害、機能障害があらわれた高齢者とのかかわりの経験がない児童にとっては、ごく自

然な反応であろう（最初の事例は、認知症かどうかは児童にはわからないものの、少なくともコミュニケーション障害に関しては、認知症と同様の様相が見られると言えるため、以下、認知症高齢者に対する対応と同様と考えることとする）。しかし、外林（1984）が、「他人から教えられた知識ではなく、自分で直接に感じ取ることができるところにロール・プレイングの価値があります」と指摘したように、両事例とも、役割演技で認知症高齢者とのかかわりを演じることで、認知症高齢者に対する理解が変化している。このことについて、事例の内容から詳細に述べる。

最初の事例（資料名「おじいちゃんの海」）では、おじいちゃんの喜びを自分の喜びとして感じるだけでなく、在宅介護の主な介護者である母親に対していたわりの気持ちを抱き、家族それぞれの感情を尊重し状況に配慮しながら、自ら家族としてのより積極的な役割を担おうとする新たな役割を実現している。その結果、おじいちゃんの喜びを我が喜びとして実感することができた。同時期に同じ学年の別のクラスで、同じ資料（おじいちゃんを海に連れて行ったことを付け足して提示した）を用いた話し合いによる道徳の授業を行った。その感想文と比較すると、大きく違うのは、役割演技による授業では、実生活での新しい役割の実践意欲を書いたものや、「おじいちゃんの喜びは家族の喜びだ」と綴ったものはそれぞれ7.4%、14.8%見られたが、話し合いによる道徳の授業では見られなかった。逆に、話し合いによる授業では、役割演技による授業では見られなかった「おじいちゃんをつれていくのは手がかかって大変」「事故にあったら大変」といった感想や、「我慢して連れて行く」といった感想がそれぞれ3.2%、9.4%の児童に見られた。このように、話し合いの授業では、役割演技による授業と違い、高齢者に対して、「世話がやける、やっかいな人」で「我慢しなければつきあえない」「かわいそうな人」といったイメージを払拭することができず、相手の喜びを自分の喜びと感じることはできなかったのである。

また、次の事例（資料名「おばあちゃんとの話」）では、児童は初め、親切にされたことを喜んでそのことを翌日には忘れてしまうおばあちゃんとの関係に、やるせなさや憤りを覚えた。そのため、「せめて名前だけでも憶えてもらおう」と考え、役割演技で親切な行為を行うたびに自分の名前を連呼した。だが、演じられた関係の中で、それが相手を思いやった行為とは違っていることに気づく。そして、忘れられてもいいから親切にしようと、自主的により親切な役割を創造することができた。さらに、主人公と共有できた喜びを忘れないようにしようとしても忘れてしまうおばあちゃんの悲しみに気づき、「おばあちゃんにとっては、太郎といるときの喜びは10でも、その後忘れてしまつてまた0になってしまう。そして、また太郎と会って喜びが再び10になるように、おばあちゃんの喜びは10と0の繰り返しだ。でも、太郎はおばあちゃんと違って、おばあちゃんとの交流を繰り返すうちに、10の喜びが15になり20になり25になり… 増えていくけれど、0にはならない。」と、実感的に理解することができた。

このように、児童は、認知症高齢者に対する一方的な理解から、役割演技によって高齢者の喜びや悲しみといった状況的な理解へと変化した結果、相互的な役割関係、すなわち、新たな役割関係の創造が切実な課題として児童に迫ってきた。そして、児童の感想に、おばあさんやおばあちゃんを主語とした肯定的・主体的感想が多く見られたように、児童は役割演技によって認知症高齢者をさらに深く理解し、適切な支援者としての役割関係が創造されたのである。このような、①認知症高齢者に対する一方的な理解から、相互的な状況的理解へと変化し、②自分とのかかわりとして認知症高齢者とのより良い関係を追究し、③新たな役割を創造し、支援者の役割を実感的に理解するといった一連の過程は、少なくとも初めの事例での話し合いによる授業では見られなかったことから、役割演技による道徳の授業が認知症高齢者の理解に果たした特徴的な効果であり、そこに、（認知症）高齢者とのかかわりを資料とした役割演技による道徳の授業を計画的・目的的に行っていくことの意義があると考えられる次第である。

5. おわりに

認知症高齢者には記憶障害および認知機能障害に起因するコミュニケーション障害があり、冒頭に述べた「高齢者虐待」にまではいたらなくても、しばしばケア提供者などとの関係性を悪くして、ケア場面を困難にする状況がある。一方で、湯浅ら（2006）は、認知症高齢者を肯定的に表現するスタッフ間コミュニケーションを実践した効果として、高齢者の気分や応答がよくなり認知症に見られる行動異常が減少したことなどを報告している。また、長谷川（2005）や水野（2004）は、認知症高齢者の心の向きを知り、それに沿って援助するのが認知症のケアだとするパーソン・センタード・ケアの重要性を述べている。

本稿で報告した二つの事例ともに、認知症高齢者に対しての抵抗や驚き、憤りから出発しているが、役割演技をとおして、認知症高齢者の抱く不安や悲しみ、喜びに気づき、それに沿ったかかわりを創造し、最終的には相手の喜びを我が喜びと感じることで、認知症高齢者を肯定的に理解している。このことは、授業後の児童の感想に、認知症高齢者を主語とした肯定的なものが多く見られたことから明かである。これはすなわち、湯浅らの言うパーソン・センタード・ケアの実現に向かわせる原動力と言える。

もちろん、学校教育は、高齢者の介護に従事する人材の育成を目的とするものではない。したがって、学校教育のカリキュラムの中には、いわゆる高齢者の介護に関する専門的なスキルなどを養う内容はない。また、本報告での二つの事例も、あくまで、道德の時間に学習する内容項目の読み物資料として、(認知症)高齢者と児童とのかかわりが描かれたものを使ったのであり、直接的に高齢者介護の学習の効果をねらったものではない。しかし、一方で、小学校学習指導要領解説道德編(2008、文部科学省)では、例えば「思いやり・親切」を内容項目とした高学年の学習では「特に相手の立場に立つことを強調する」ことや、「人間関係の深さの違いや意見の相違などを乗り越え、思いやりの心とそれが伴った親切な行為を、児童が接するすべての人に広げていく」指導をすることが大切であることが述べられている。このように、道德の授業で認知症高齢者と児童とのかかわりが描かれた資料を使った授業を否定するものではない。

さて、本稿ではここまで、認知症高齢者と児童のかかわりが描かれた資料を使った役割演技による道德の授業によって得られる「実感的理解」は、認知症高齢者の理解にとどまらず、様々な立場の人たちに対する親切な行為を生起させることや、家族で互いの幸せを考えながら、自分の果たせる役割を創造し、支え合って生きていこうとする基盤になると考えられることを明らかにした。二つめの事例では、授業後に「高齢者」や「障害者」等との交流を強く希望し、市が募集した高齢者介護施設におけるボランティア活動に、自主的に参加した児童もいた。しかし、児童が得たこの「実感的理解」は、単なる「知識」とは違い、役割演技による学習や、良質の体験・経験無くしては得ることが困難である。このように、認知症高齢者に対する肯定的理解の実現に、本事例のような役割演技による道德の授業を計画的・目的的に行う意義があると言える。さらに、その肯定的理解をもたらす「実感的理解」が、様々な立場の人たちに対する親切な行為を生起させる基盤になると考えられ、それが、本稿で明らかにした授業の可能性であると考えられる。そして、このような授業と関連させながら「交流活動」を計画的に実施することで、その活動が児童にとって、さらに関係性を拡充する豊かな体験になるものとする次第である。

〈引用・参考文献〉

- 中央教育審議会 2008 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)
- 長谷川和夫 2005 認知症ケア学会(編) 認知症ケアの基礎 ワールドプランニング
- 早川裕隆 1998 ロール・プレイングによる道德の授業の実証的研究 -「道德の時間」の指導方法の比較検討を中心にして- 上越教育大学 修士論文(未公刊)
- 早川裕隆 2004 シリーズ・道德授業を研究する1 役割演技を道德授業に 明治図書
- 厚生労働省 2009 平成20年度 高齢者虐待の防止、高齢者養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果
- 厚生労働省 2009 要介護認定における「認定調査票記入の手続き」、「主治医意見書記入の手続き」及び「特定疾病にかかる診断基準」について
- 厚生労働省 2010 平成21年度 高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果
- 水野 裕 2004 Quality of Careをどう考えるか Dementia Care Mapping (DCM) をめぐって 日本老年精神医学雑誌15 1384-1391
- 文部科学省 2005 義務教育に関する意識調査
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領解説 道德編 日本文教出版
- 文部科学省 2008 小学校学習指導要領 東京書籍
- 文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説 道德編 東洋館出版社
- 文部省 1999 高齢者との連携を進める学校施設の整備について -世代を越えたコミュニティーの拠点作りを目指して-
- 長畑多代, 松田千登勢, 小野幸子 2003 介護老人施設で働く看護師の痴呆症状に対するとらえ方と対応 老年看護学8(1) 39-49
- 坂口 力 他 2004 特集 痴呆性高齢者対策 厚生労働6月号 4-11 厚生労働省
- 外林大作 1984 賞罰をこえて -ロール・プレイングのテクニク- プレイン出版
- 総務庁 1999 平成10年度 児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査結果
- 湯浅美千代, 野口美和子 2006 認知症を有する高齢者を肯定的に表現する職員間のコミュニケーションの効果 老年看護学10(2) 51-61

展開の概要

学習活動と発問	評価と教師の支援
<p>1 資料「おじいちゃんの海」を読んで話し合う。</p> <p>○「さいなら」といってかけだしたときのよしこは、どんな気持ちだったのでしょうか。</p> <p>○おじいちゃんをデイケアセンターに預けて、お母さんとお父さんと一緒に海に行かれるようになったとき、よしこは、どんな気持ちだったのでしょうか。</p> <p>○おじいちゃんに、「よしこがおじいちゃんの海だ」と思われたとき、よしこはどんな気持ちになったのでしょうか。</p> <p>◎来週海に行かれることになったとき、よしこは、どんな気持ちになったのでしょうか。よしこと、家族を演じてみましょう。</p>	<p>○夏休みに、自分だけ家族と出かけることができないよしこの悲しさややるせなさを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体の不自由なおじいちゃんを一人にすることができないので、どこへも出かけられないことをとらえるようにする ・どこにもでかけられないことで、おじいちゃんを恨む気持ちが起こったことを理解する。 <p>○思いがけず、海に行かれることになったよしこの喜びを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デイケアセンターに行くことは、おじいちゃんにとってもいいことであること、いつも介護をしているお母さんの息抜きにもなることなどをとらえられるようにする。 ・いつもおじいちゃんの世話をしているお母さんの苦労をとらえられるようにする。 <p>○海をしたっているおじいちゃんをみて、おじいちゃんと一緒に海に連れていけばよかったとも思い始めているよしこの気持ちを理解する。</p> <p>○家族の一員としてのおじいちゃんを思いやる家族を演じる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が演じたい家族を演じられるようにして話し合う。 ・おじいちゃんを、大切な家族の一員として尊重しようとする家族が演じられるようにしたい。 ・おじいちゃんも一緒に連れていくという意見が出た場合は、介護するお母さんの苦労について考えられるようにして、お母さんの負担を軽くするために、お母さんと一緒におじいちゃんの世話をしようとするよしこやお父さんが演じられるようにしたい。 ・おじいちゃんの気持ちが明らかになるようにする。
<p>2 本時の感想を書く。</p>	<p>○家族みんなのことを思いやる関係の大切さに気付き、自分の在り方を見つめるようになる。</p>

図3 「おじいちゃんの海」指導略案

展開の概要

学習活動と発問	評価と教師の支援
<p>1 認知症の老人について知っていることを話し合う。</p>	<p>○学習意欲が高まったか。 ・資料への導入を図る。</p>
<p>2 資料「おばあちゃんとの話」を読んで話し合う。</p> <p>○「ぼく」はおばあちゃんをどんな気持ちで誘ったのでしょうか。</p> <p>○おばあちゃんにいろいろなことを聞かれたときのぼくは、どんな気持ちだったでしょう。ぼくとおばあちゃんを演じてみましょう。</p> <p>○おばあちゃんの目が潤んでいるのを見たぼくは、どんな気持ちになったでしょう。</p> <p>◎数日後におばあちゃんから「おめえ、だれだ。」と言われたとき、ぼくはどんな気持ちになったでしょう。ぼくとおばあちゃんを演じてみましょう。</p>	<p>○おばあちゃんを誘った動機のいたわりの気持ちを想像することができたか。</p> <p>・おばあちゃんの行動をとらえられるようにする。</p> <p>・どんな気持ちで「おばあちゃん、家さよってお茶でも飲まねえか」と言ったのかを問う。</p> <p>・おばあちゃんは誘われてすぐについて行くかをどうかを想像するようにして、「ぼく」が大変だったことに気づくようにする。</p> <p>○おばあちゃんを喜ばせ、励まそうと努力している心情や様子を理解することができたか。</p> <p>・おばあちゃんに親切なぼくが演じられるように援助する。</p> <p>・ぼくとおばあちゃんの相互の感情が明らかになるようにする。</p> <p>・おばあちゃんの喜びが明らかになるようにする。</p> <p>○おばあちゃんのためにつくした努力が通じたぼくの喜びを、共感的に理解することができたか。</p> <p>○ぼくの行動は、おばあちゃんに感謝してもらったためにとった行動ではないことや、喜び感謝しているのにどうしても忘れてしまうおばあちゃんの立場に気づき、より価値観の高い行為に対する実践意欲が高まったか。</p> <p>・おばあちゃんに対するぼくの気持ちを話し合い児童が演じたいぼくを演じるようにしながら、おばあちゃんとの相互関係を理解できるようにする。</p> <p>・ぼくの親切に感謝しながらも、覚えていられずに、数日後には忘れてしまうおばあちゃんの気持ちが明らかになるようにする。</p> <p>・ぼくは、自分の親切でおばあちゃんが喜んだのに、さらに感謝されていたのかどうかを問う。</p>
<p>3 本時の感想を聞く。</p>	<p>○おばあちゃんに対するぼくの気持ちの変化への気づきを明らかにしながら、自分のあり方を見つめられるようになったか。</p>

図4 「おばあちゃんとの話」指導略案

Understanding a Issue of Aged with Dementia

—Through moral education using role-playing in School Education—

HirotaKa HAYAKAWA *

ABSTRACT

Approximately 2 million the aged with dementia is considered to be 2.5 million by 2015. Caring at home is thought to be the best way to take care of them; however, 50% of the aged who is maltreated is with dementia. This fact shows that understanding the aged with dementia is a serious issue. The author thinks that it is important to teach sympathy based on bilateral relations and mutual understanding using role-playing in moral class.

* School Education